Osaka University Knowledge Archive

Title	福島方言の自発表現
Author(s)	白岩, 広行
Citation	阪大日本語研究. 24 P.35-P.53
Issue Date	2012-02
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/10406
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/

Osaka University

『阪大日本語研究』24（2012）

福島方言の自発表現

On Spontaneous Form in Fukushima Dialect of Japanese

白岩 広行
SHIRAIWA Hiroyuki

キーワード：福島方言、自発、受身、非情物主語、逆使役

要旨

東北を中心とした東日本の諸方言では、自発表現としてサルおよびルという形式が存在し、「自発」「可能」「逆使役」の３つの用法で使われている。しかし、福島方言の自発表現ルは「自発」の用法を持たず、「逆使役」の用法でのみ生産的に使用される。また、「可能」の用法は「書グ」など特定の動詞でしか実現しない。

このうち、「逆使役」の用法では、a）主語が非情物にかぎられる、b）「～ニ」による動作主の表示を許さない、c）テイル形で結果状態を表す、など、他方言の自発表現と同様の特徴が福島方言のルにも観察される。しかし、基本的にテイル形以外では使用されず、動作の対象に生じた結果状態のみを表すという点で福島方言のルは他方言の自発表現と異なっている。また、「可能」の用法では、特に非情物の性質叙述にかぎって使用されるという特徴を持つ。

いずれの用法でも、「非情物に生じた／備わった非動的なことがら（状態や性質）」を表すという点で福島方言のルには共通した特徴が見られる。福島方言のルは、意志を持った動作主の存在を排した結果として前面化される動作の対象としての非情物のありかたを表すことに特化して使われていると考えられる。

1. はじめに

福島県県北地方の方言（福島市を中心とした地域。以下、単に「福島方言」とする）では、非情物の結果状態や性質を表す場合にル（-(r)ar-）という形式が用いられる。

（1）黒板に変な字が書ガッテル。（書いてある／書かれている）

（2）道路に白線が引カッテル。（引いてある／引かれている）

（3）このペンはよく書ガル。（書ける）

（4）この将棋の駒はまっすぐに立ダル。（立つ）

このルという形式は通常テイル形をとり、（1）（2）のように、ッテル（＜ル＋テイル）という形で標準語の「～てある」「～（さ）れている」に近い意味を表す。また、「書グ」「立ズ」など一部の動詞ではテイル形をとらずに使用され、（3）（4）のように非情物の性質を表す。

このような表現を持たない方言の話者には、特に（1）（2）は受身表現の例と解釈されるか

もしれないが、福島方言では、受身の表現として標準語と同様のレル（-(r)are-）が存在し、ルとは別に用いられている。

（5）黒板に俺の悪口が書ガッチェル。　　（受身：書ガッチェル＜書ガレデル）

受身表現レルとの違いについては、後の３節や４節でも少し取り上げるが、いずれにせよ、ルは受身の表現ではない。

本稿で取り上げる福島方言のルは、東日本の諸方言で報告されている自発表現のひとつと考えられる。例えば、Sasaki & Yamazaki（2006）、佐々木（2007）は以下の３つの用法を持つ形式として、北海道方言の自発表現サルを記述している。

（6）a. 私はご飯が食べラサル。（＝私は自然にご飯を食べてしまう［自発］）
b. このペンはよく書カサル。（＝このペンはよく書ける［可能］）
c. 大きな丸が書カサッテル。（＝大きな丸が書いてある［逆使役］）
（佐々木 2007:259）

a はその動作を意志とは無関係におこなってしまうことを表す「自発」の用法、b はモノの性質など状況可能的な意味を表す「可能」の用法、c は動作の対象を主語にとり、その状態変化を表す「逆使役」の用法である。詳しくは 2.1 節で整理するが、（6）のような各用法を持つ自発表現のサルは北海道方言（山崎 1994、Sasaki & Yamazaki 2006、円山 2007、佐々木 2007）、盛岡市方言（竹田 1998）、宇都宮市方言（加藤 2000）、静岡県大井川流域方言（中田 1981）の各方言で報告されている。また、山形市方言では、同様の特徴を持つ自発表現としてルが報告されている（森山・渋谷 1988、渋谷 2002; 2006。論者自身は用法分類をしていないが、（6）の a ～ c に相当すると考えられる用法を筆者が拾って a ～ c と並べた。訳も渋谷の記述をもとに筆者が適宜補っている）。

（7）a. いつのまにか寝ラタキャ。（寝てしまったよ）[1)]　　（渋谷 2006:50）
b. このペンは、すらすら書ガル。（書ける）　　（渋谷 2006:54）
c. 看板に変な字が書ガッタ。（書いてある）[2)]　　（渋谷 2006:59）

福島方言のルの例として挙げたうち、（1）（2）は（6）（7）の c の用法と同じもので、（3）（4）は b の用法と同じものと考えられる。このような用法上の共通点、および山形市方言ルとの形の上での同一性から、福島方言のルは、東日本諸方言で報告されている自発表現のひとつとして位置づけられる。

しかし、自発表現の用法として報告されているうち、（6）（7）の a のような用法、つまり、「意志的でない動作を表す」という用法では福島方言のルは使用されない。

（8）* 俺はご飯が食べラル。（自然に食べてしまう）

（9）* いつの間にか寝ラッタ。（寝てしまった）

また、bのような用法、つまり状況可能の意味を表す用法は、「書グ」など特定の動詞でしか使用されない。

（10）このペンはよく書ガル。（書ける）

（11）？この消しゴムはきれいに消サル。（消せる）

（12）＊この糊はしっかり貼ラル。（貼れる）

つまり、福島方言のルは、ほかの方言の自発表現とくらべて、かなり使用範囲がかぎられるということになる。本稿では、そのような福島方言のルの特性について、他方言のサル・ルの事例と比較しながら記述をおこなう。

なお、自然談話資料から十分な数の用例をとるのが難しい形式であるため、分析にあたっては、母方言話者としての筆者の内省を用いる[3)]。本稿で掲示する例文は、断りのないかぎり筆者による作例であり、読みやすいように、議論の対象となる述語部分のみをカタカナ書きの方言形式とし、それ以外の箇所は標準語訳とした。先行研究からの引用も、通読の便を考え、表記をそのように統一している。

議論の道筋をあらかじめ示しておくと次のようになる。本稿では、まず、2節で先行研究の整理をし、他方言の自発表現の用法などについて概観する。そして、3節でルの形態的な特徴をまとめたうえで、4節で生産的な使用が見られる（1）（2）のような用法（逆使役）のルについて分析をおこなう。その後、5節で特定の動詞にかぎって見られる（3）（4）のような用法（可能）について述べ、6節で全体のまとめをおこなう。

2. 先行研究

1節で挙げたように、サルおよびルという自発の表現については、東日本各地の方言で記述がなされている。ここでは、それらの記述をもとに、福島方言のルについて考えるうえで関与的な事項を中心に、他方言の自発表現の特徴を概観する。

2.1. 用法の整理

特に用法分類が設けられていない山形市方言での記述（森山・渋谷 1988、渋谷 2002; 2006）をのぞけば、自発表現の用法は、どの記述でもおおよそ3つに分けられている。方言によって、あるいは論者によって、用法の名づけや定義、記述された特徴の細部に異同があり、それらをまとめて論ずるのはやや粗雑なことではあるが、それぞれの用法について、どの記述でもほぼ共通して指摘されている事項を整理すると以下のようになる（山形市方言については特に用法分類はなされていないが、それに相当すると考えられる例を挙げておく）。

自発表現の持つ１つ目の用法は、文字通り「自発」と呼べるもので、その動作が動作主の意志とは無関係に起こってしまうということを表すものである（下例のうちｃは「～てしまった」相当のチャッタが、d、ｅは過去辞のタが後接）。

（13）a. 私はご飯が食べラサル。（北海道方言　佐々木 2007:259）

b. 見るつもりがなくてもテレビをつけていれば見ラサル。（盛岡市方言　竹田 1998:41）

c. 海を見たらつい走ラサッチャッタ。（宇都宮市方言　加藤 2000:10）

d. 一箱で済むと思ったが、ついつい煙草を吸ワーサッタ。（静岡市井川方言　中田 1981:5）

e. いつのまにか寝ラタキャ。（山形市方言　渋谷 2006:50）

これらの例では、当該の動作（食べる／見る／走る／煙草を吸う／寝る）をおこなうつもりがないのにおこなってしまったということを自発表現のサル・ルが表している。

２つ目は、状況可能的な意味が表されるものである（下例のうちｂは否定辞のネが後接）。

（14）a. このペンはよく書カサル。（北海道方言　佐々木 2007:259）

b. うちにはもう車が置ガサラネ。（盛岡市方言　竹田 1998:38）

c. この店なら腹いっぱい食ワサル。（宇都宮市方言　加藤 2000:10）

d. この着物はまだまだ着ラーサル。（静岡市井川方言　中田 1981:5）

e. このペンは、すらすら書ガル。（山形市方言　渋谷 2006:54）

これらの例では、動作主の能力とは関係なく、動作主を取り巻く状況によって当該の動作（書く／車を置く／腹いっぱい食う／着る／書く）が可能であることを自発表現が表している。（14）ではモノの性質を述べるような例を中心に挙例したが、動作主の一時的な状態を表す（15）のような例も報告されている（下例のうちａ、c、ｄでは否定辞のナイ、ノー、ネが後接）。

（15）a. 足が痛くて走ラサラナイ。（北海道方言　円山 2007:59）

b. 今日は暇だから行カサル。（宇都宮市方言　加藤 2000:40）

c. 医者に言われて俺は煙草が飲マーサラノー。（静岡市井川方言　中田 1981:4）

d. 酒を飲みたいのに、なかなか飲マラネ。（山形市方言　渋谷 2006:52）

いずれにしても、動作主の制御によらず当該の動作が可能になるという点では共通しており、能力可能の意味では基本的に使用されない[4)]。どの方言でも、レルや可能動詞など、可能を表す表現はほかに存在しており、サルやルが可能表現そのものとして使われているわけではない。動作主の意志や制御によらず事態が成立するという自発表現の意味が状況可能的な意味につながっているものと考えられる。

３つ目の用法は、主として非情物を主語にとり、その状態変化を表すものである。

（16）a. 大きな丸が書カサッテル。　（北海道方言　佐々木 2007:259）
b. あそこの机の上に赤い本が置ガサッテル。　（盛岡市方言　竹田 1998:36）
c. 魚が焼カサッテル。　（宇都宮市方言　加藤 2000:34）
d. 布団がきれいに畳マサッテル。　（静岡市井川方言　中田 1981:7）
e. 看板に変な字が書ガッタ。　（山形市方言　渋谷 2006:59）

（16）の例では、動作の対象となるもの（主として非情物）が主語になり、動作を受けて生じた状態の変化が示されている。誰が当該の動作をおこなうかは問題にならず、その動作の対象が「書かれた／置かれた／焼かれた／畳まれた／書かれた」状態になることが示される。（16）では、1 節で挙げた福島方言の例（1）（2）にあわせてテイル形の例を挙げたが（山形市方言では、ッタがテイルに相当）、テイル形でない例も報告されている（下例では過去辞のタが後接）。

（17）a. 一時間で校庭に大きな丸が描カサッタ。　（北海道方言　佐々木 2007:261）
b. 魚が焼カサッタ。　（宇都宮市方言　加藤 2000:25）
c. 家の外で集めた枯葉を焼いた。枯葉は簡単に焼ガタ。
（山形市方言　渋谷 2006:57）

また、（16）（17）では他動詞の例を挙げたが、非情物を主語にとった自動詞文で自発表現が生起する場合もある。

（18）a. 放っといたら凍ラサッタ。　（北海道方言　山崎 1994:232）
b. このあたりはもう雪が溶ケラサッテイル。　（北海道方言　円山 2007:62）
c. ボールが弾マサッタ。　（宇都宮市方言　加藤 2000:22）
d. 紐でしばったら血が止マラーサッタ。　（静岡市井川方言　中田 1981:6）

（16）（17）（18）の各例で共通するのは、非情物が主語になり、その状態変化が表されるということである。2.2 節でも後述するが、意志を持った動作主の存在を排して非情物の状態変化のみを表現するという点で、この用法は自発表現の本来的な意味とつながっているといえる。

以上、各方言で報告されている自発表現の用法を整理した。本節冒頭で述べたように、方言によって、あるいは論者によって記述のありかたに異同があり、それぞれ深く対照をおこなう余地はあるが、さしあたって福島方言の自発表現ルの特徴をつかむために必要な程度に、大づかみなまとめをおこなった。なお、上に挙げた用法のうち、1 つ目のものは「自発」、2 つ目のものは「可能」と呼ばれているが[5)]、3 つ目の用法は「非情物に出現する結果の状態」（山崎 1994）、「非情物主語の到達用法」（円山 2007）、「逆使役」（佐々木 2007）、「受身」（竹田 1998）、「自然発生用法」（加藤 2000）、「中相動詞的表現」（中田 1981）などと、論者によって呼び方が異なっている。

1 節であらかじめ述べたが、福島方言のルは、これらの用法のうち、1 つ目の「自発」の用

法では使用されない。また、2つ目の「可能」の用法も、「書グ」など特定の動詞でしか使われない。つまり、非情物の状態変化を表すという3つ目の用法でのみ、福島方言の自発表現ルは生産的に用いられるということになる。

2.2.「逆使役」の用法について

2.1節で挙げた自発表現の3つの用法のうち、福島方言のルが生産的に用いられるのは、非情物の結果状態を表す3つ目の用法のみである。そこで、ここでは、特にこの用法に焦点を当てて分析をおこなっているSasaki & Yamazaki（2006）および佐々木（2007）を中心に、この用法について整理をおこなう。なお、2.1節で挙げたように、この用法の呼び方は論者によって様々だが、以下では佐々木の用語にしたがってこの用法を「逆使役」と呼ぶことにする。

Sasaki & Yamazaki（2006）は、北海道方言のサルを対象にしたものだが、他動詞文の主語が消去され、目的語が主語になるという点でサルのこの用法を特徴づけている（valance reduction）。このような格パターンの変更は受身表現と似ているが、動作主（＝元の文の主語）が「～ニ」で示されないという点でサルによる自発の表現は受身表現と異なっている。

（19）a. 私が変な字を書ク。

b. 変な字が書カサッテ困る。

c. *私ニ変な字が書カサル。　（Sasaki & Yamazaki 2006:357-358[6)]）

また、サルの生起した動詞述語はアスペクト的に達成（achievement：Vendler1967の4分類によるもの）の意味を表す。つまり、主語となった非情物の状態変化を表し、変化の過程としての動作については表さない。したがって、「1時間で」のような達成時点を表す副詞表現とは共起するが、「1時間」のように持続的な時間を表す副詞表現とは共起しない。

（20）a. *一時間校庭に大きな丸が書カサッタ。

b. 一時間で校庭に大きな丸が書カサッタ。（Sasaki & Yamazaki 2006:361-362）

また、（21）のようにテイル形をとった場合、結果状態の意味でしか解釈することができず、丸が書かれる動作が進行中という読みは成り立たない。

（21）校庭に大きな丸が書カサッテル。

以上のようなことから、Sasaki & Yamazaki（2006）は、動作主による意志的な動作という側面が削除され、それによって生じた状態変化のみが焦点化されるのがサルによる自発構文の特徴であると結論づけている。

また、これに続く佐々木（2007）は、逆使役用法のサルが生起する動詞は、動作の結果として対象が状態変化を起こすタイプの動詞、つまり、アスペクト的に完成（accomplishment）の意味を持つ動詞にかぎられるという傾向をアンケート調査の結果から示している。これは、

例えば「(丸を) 書ク」「(壁を) 塗ル」「(すそを) 縫ウ」などの動詞である。「(丸を) 書ク」は、動作主の書く動作と、その結果として丸が書かれた状態になる状態変化の両方を含意するが、サルが生起すると状態変化の意味のみが表されることになる (完成動詞のアスペクト的な意味が達成に変わる)。逆使役用法のサルはそのような論理構造の変換をもたらすため、アスペクト的に完成の動詞に生起しやすいのだと解釈される。

このほか、佐々木 (2007) は、アスペクト的な特徴づけには、動詞そのものだけでなく、動詞句全体の情報が関与的であるとしている。例えば、動詞「押ス」は「背中ヲ押ス」のように対象の変化が含意されないときにはサルが生起しにくいが、「判子ヲ押ス」のように対象の変化が含意されるときにはサルが生起しやすい。

このようなサルの用法を、Sasaki & Yamazaki (2006) および佐々木 (2007) は、他動詞から自動詞を派生させる文法的な手段として、Haspelmath (1993) にならい「逆使役 (anticausative)」としている。

以上に述べた北海道方言サルの逆使役用法は、2.1 節で 3 つ目の用法として挙げた各方言のサル・ルの例にも、おおよそ当てはまる (ただし、(18) のように自動詞に生起した例のあつかいは別に考えねばならず、加藤 (2000) の記述する宇都宮市方言ではこの用法のサルがテイル形で動作進行の意味を表しうるなど、地点によって多少の異同はある)。また、4 節で述べるように、福島方言ルの用法にもおおよそ当てはまるものである。

3. 形態面の特徴

本節では、形態的な面から福島方言の自発表現ルの特性を整理する。先に 3.1 節として述語内の生起の位置を確認し、3.2 節で活用のあり方について示す。

3.1. 述語内の生起の位置

ルは動詞述語にのみ生起する形式であり、形容詞述語や名詞述語には生起しない。

(22) 書ガル。

(23) * 白ガル。

(24) * 元気ダル

(25) * 先生ダル。

子音で終わる動詞語幹には -ar-、母音で終わる動詞語幹には -rar- という形で後接し、アスペクト、極性、テンス、ムードなどの諸形式は、ルの後ろに位置する。

(26) 書ガル。

kag　　-ar　-u

「書く」の語幹　自発　現在

(27) 分ゲラッテル

wage　　-raQ　　-te　　-ru（<*wage-rar-ite-ru）

「分ける」の語幹　自発　　継続相　　現在

(28) 書ガッテネガッタベナ。（書いてなかっただろうな）

kag　　-aQ　　-te　　-negaQ　-ta　　-be　　-na

「書く」の語幹　　自発　　継続相　否定　　過去　　推量　文末詞

福島方言では、受身・可能の表現として標準語と同じくレル（-(a)re-）が使用されるが、自発のルと受身・可能のレルは共起しえない。

(29) * 書ガラレル。

*kag　　-ar　-are　　-ru

「書く」の語幹　　自発　受身・可能　　現在

(30) * 書ガレラル。

*kag　　-are　　-ar　-u

「書く」の語幹　　受身・可能　　自発　現在

以上のことから、ルは、受身・可能のレルと同じく動詞述語のヴォイスに関連した形式であると位置づけられる。

3.2. 活用のありかた

自発表現ルは四段型の活用をする。無標の場合、および受身・可能のレル（下一段型）の場合とあわせて活用のしかたを整理すると表 1 のようになる。1 節であらかじめ述べたように、自発表現ルは基本的にテイル形で使用されるが、一部の動詞ではテイル形でなくとも使用される。この表では、活用の全体像を示すため、テイル形以外でもルが使用される動詞「書グ」を例にした。

なお、福島方言では、述語構造内において、下のような音変化が起こるため、規則的に活用すれば「書ガラネ」「書ガレネ」「書カレダ」となるべき形は、それぞれ「書ガンネ」「書ガンニ」「書ガッチャ」と実現されることが多い [7)]。表中では、前者の規則どおりの形をカッコ書きにして示した。

(31) -arane- > -aNne-

(32) -arene-> -aNni-

(33) -aret-, -ared- > -arQty-

表１　自発のルおよび受身・可能のレルの活用（動詞「書グ」の場合）

			無標	自発	受身・可能*
完成相	肯定	現在	書グ	書ガル	書ガレル
		過去	書イダ	書ガッタ	書ガッチャ （＜書ガレダ）
	否定	現在	書ガネ	書ガンネ （＜書ガラネ）	書ガンニ （＜書ガレネ）
		過去	書ガネガッタ	書ガンネガッタ （＜書ガラネガッタ）	書ガンニガッタ （＜書ガレネガッタ）
継続相	肯定	現在	書イデル	書ガッテル	書ガッチェル （＜書ガレデル）
		過去	書イデダ	書ガッテダ	書ガッチェダ （＜書ガレデダ）
	否定	現在	書イデネ	書ガッテネ	書ガッチェネ （＜書ガレデネ）
		過去	書イデネガッタ	書ガッテネガッタ	書ガッチェネガッタ （＜書ガレデネガッタ）
テ形中止			書イデ	書ガッテ	書ガッチェ （＜書ガレデ）

＊ このほか、可能表現として可能動詞（書ゲル）も使用されるが、その特徴は標準語の場合と同じである。

この表は五段動詞「書グ」の場合だが、一段動詞・サ変動詞には、自発表現ルがテイル形以外でも使用される動詞は存在しない。つまり、必ずテイル形で使用されるのだが、その形を一段動詞「分ゲル」やサ変動詞「スル」を例に示すと以下のようになる。

（34）自発：分ゲラッテル　／　受身：分ゲラッチェル

（35）自発：シラッテル　／　受身：シラッチェルあるいはサッチェル

これは肯定かつ現在の場合だが、否定の場合は「分ゲラッテネ」「シラッテネ」、過去の場合は「分ゲラッテダ」「シラッテダ」のように、テの後ろに続く部分が「書グ」の場合と同様に語形変化する（受身の場合はチェの後ろに続く部分が同様の語形変化をする）。

また、４節で述べるが、ルは基本的に他動詞に生起する形式であり、自動詞「来ル」、つまりカ変動詞にはそもそもルが生起しえない[8)]。

4. 基本的用法

1 節であらかじめ示したとおり、福島方言の自発表現ルは、基本的にテイルの形をとって非情物に生じた結果状態を表す（2.2 節で見た「逆使役」の用法）。1 節でもいくつか例を挙げたが、以下にもいくつか用例を掲げておく。

（36）電信柱に政治家のポスターが貼ラッテル。（貼ってある／貼られている）

（37）部屋に布団が敷カッテル。（敷いてある／敷かれている）

（38）ごはんがほかほかにアッタメラッテル。（温めてある／温められている）

（39）このメールは変なファイルが添付シラッテル。（添付してある／添付されている）

本節では、この用法の自発表現ルの基本的特徴について、他方言との共通点（3.1 節）、他方言との相違点（3.2 節）の順にまとめる。

4.1. 他方言と共通する点

ここでは、他方言における記述とおおよそ共通する点として、a）主語が非情物にかぎられること、b）「〜ニ」による動作主の表示を許さないこと、c）テイル形で結果状態を表すことの 3 点を挙げる。

a）主語が非情物にかぎられる

2.1 節の（16）〜（18）の例文で示したとおり、この用法では、主として非情物を主語として自発表現が用いられる（山崎 1994、竹田 1998、加藤 2000、円山 2007 がそれぞれの記述で指摘している）[9)]。福島方言の場合も同様で、ルは、次のように主語が非情物の場合にかぎって使用される。

（40）リンゴは 3 つずつ、かごに分ゲラッテル。

（41）看板が道路の脇に寝ガサッテル。

（42）この縫い物は赤い仕付け糸でシツケラッテル。

（43）* 宿泊客は 3 人ずつ、部屋に分ゲラッテル。

（44）* 赤ん坊がゆりかごに寝ガサッテル

（45）* 隣の家の子供は行儀よくシツケラッテル

b）「〜ニ」による動作主の表示を許さない

この用法では、動作の対象が主語になり、その対象の結果状態が表される。その点では受身表現と似通っているが、Sasaki & Yamazaki（2006）の引用として（19）で示したとおり、

自発表現の場合、受身表現と違って動作主を「～ニ」で示すことができない。このことは同じく北海道方言について円山（2007）、宇都宮方言について加藤（2000）が指摘しており、2.1節で挙げたその他の先行研究でも、この用法の例で動作主を「～ニ」で表した例は見られない。

福島方言の場合も同様で、次の例で示すように、受身表現の場合は動作主を「～ニ」で示すことができるが、自発表現の場合はそれが許されない。

（46）ダレカニ口座の預金がオロサッチェル。（受身）

（47）お膳はもう仲居サンニサゲラッチェル。（受身）

（48）* ダレカニ口座の預金がオロサッテル。（自発）

（49）* お膳はもう仲居サンニサゲラッテル。（自発）

典型的な動作主とはいえないが「柵｛で／に｝囲まれている」のように、受身表現では「～デ」と「～ニ」が交替可能な場合でも、自発表現は「～ニ」を許さない。

（50）この庭は｛柵デ／柵ニ｝囲マッチェル。（受身）

（51）この庭は｛柵デ／* 柵ニ｝囲マッテル。（自発）

なお、下の（52）のように動作主を明示しない場合、受身表現と自発表現の両方が使用可能だが、受身表現では「被害」のような意味が表されやすい（泥棒に預金をおろされた状況など）のに対し、自発表現では事実が単に客観的に提示される（自分のおろした額を事務的に確認する状況など）。このような両者の違いは、山形市方言における渋谷（2006:59）の記述などでも示されている。

（52）口座の預金が10万円｛オロサッチェル（受身）／オロサッテル（自発）｝。

c）テイル形で結果状態を表す

2.2節でSasaki & Yamazaki（2006）の論として示したように、この用法では動作の結果として生じた状態の変化が表される。そのため、テイル形をとった場合には、進行中の動作ではなく、その動作によってもたらされた結果状態の意味が表される。このようなアスペクト的な特徴はほかの地点においてもほぼ共通しており、2.1節で挙げた各先行研究で挙げられているテイル形の用例はほとんどが結果状態を表したものとして解釈される[10)]。

福島方言のルも、テイル形で結果状態の意味のみを表し、進行中の動作を表すことはない。

（53）（片付け中の倉庫を見て）* 倉庫が少しずつカダズゲラッテル。

（54）（机を並べる作業を見て）* 机が次々と並ベラッテル。（進行中の動作）

（55）（片付けが済んだ倉庫を見て）倉庫がきれいにカダズゲラッテル。

（56）（机を並べ終わった部屋を見て）机がまっすぐに並ベラッテル。（結果状態）

また、このことと関連して、佐々木（2007）は、逆使役用法のサルがアスペクト的に完成（accomplishment）の意味を持つ動詞に生起しやすい傾向を指摘しているが（2.2節）、福島

方言のルも、動作の結果として対象の状態変化が生じることを表す動詞にのみ生起する。(58)のように、対象の状態変化を含意しない動詞にはルは生起しない。

(57) 塗ラッテル／縫ワッテル／書ガッテル／囲マッテル／乾カサッテル／‥‥

(58) * 叩ガッテル／ * 飲マッテル／ * 歌ワッテル／ * 忘レラッテル／‥‥

(58) のような動詞の場合、結果状態を表しうる文脈を与えても、通常、ルの生起は許されない。例えば、(59) のように一升瓶の酒をすべて飲んで空にしたという結果状態を表す文脈でも飲マッテルという表現は使えず、「飲ミ干ス」「飲ミキル」などの動詞を使わねばならない。

(59)（一升瓶の酒が空になっている）

この酒はきれいさっぱり {* 飲マッテル／飲ミ干サッテル／飲ミキラッテル}。

しかし、2.2 節で佐々木（2007）の記述として見たように、動詞句レベルの情報が関与する場合はある。例えば、動詞「押ス」は必ずしも対象の変化を含意しないが、「エレベーターのボタンを押ス」のような例では、ボタンが点灯するなど、対象の状態変化が含意されるためにルが生起しうる。

(60) * リヤカーが後ろから押サッテル。

(61)（エレベーターで 3 階のボタンが光っている）3 階のボタンが押サッテル。

以上、福島方言のルについて、他方言の自発表現と共通する点を中心に、その特徴を挙げた。意志を持った動作主による動作という側面を排し、その結果として非情物に生じた状態を表すという点で、福島方言のルは、他方言の自発表現の逆使役用法と共通した特徴を持つといえる。

4.2. 他方言と異なる点

ここでは、福島方言のルについて、他方言と異なる点として、a）テイル形でのみ使用される、b）（語彙的な例外をのぞき）他動詞でのみ使用される、の 2 点について述べる

a）テイル形でのみ使用される

2.1 節の（17）で見たように、これまで報告されている各方言の自発表現では、テイル形をとらずに、状態変化の発生を表す例が見られる [11)]。

(62) a. 一時間で校庭に大きな丸が描カサッタ。（北海道方言　佐々木 2007:261）

b. 魚が焼カサッタ。（宇都宮市方言　加藤 2000:25）

c. 家の外で集めた枯葉を焼いた。枯葉は簡単に焼ガタ。（山形市方言　渋谷 2006:57）

（(17) 再掲）

この場合、結果状態ではなく、非情物に状態変化が生じたという動的な出来事が示されている

わけだが、福島方言のルは基本的にテイル形で用いられ、このように使用されることはない。

（63）＊一時間で校庭に大きな丸が描ガッタ。

（64）＊魚が焼ガッタ。

つまり、状態変化の発生という動的な出来事を表すことはなく、変化の結果として生じた状態のみを表すわけである。

（65）校庭に大きな丸が描ガッテル。

（66）魚が焼ガッテル。

この点で、福島方言のルは、（62）のような例で使用される他方言の自発表現と性格を異にしている。

ただし、福島方言のルにも、テイル形をとらずに使用される例外的な事象が 2 つある。1 つは、連体節の中でタの形をとる場合である。福島方言でも、標準語と同様、連体節内のタはテイル相当の結果状態の意味を表しうる（例：「{曲ガッテル／曲ガッタ} 釘」）。したがって、連体節内であれば、テイル相当の表現としてタの形が自然に許容されるのである（下例のガナは標準語の「の」に相当する準体表現）。

（67）校庭に {描ガッテル／描ガッタ} 大きな丸。

（68）あの竿に {干サッテル／干サッタ} ガナが俺のシャツだ。

2 つ目の例外は、テ形中止の形で、複文や複合動詞を作る場合である。

（69）しゃれた絵が飾ラッテ、部屋の雰囲気が明るくなった。

（70）実家から小包が送ラッテキタ。

この場合、結果状態ではなく、「絵が飾られる」「小包が送られてくる」という動的な出来事として非情物の状態変化が表される。なぜこのような例が許容されるのか十分な解釈は用意できていないが、ひとまず、例外的な事例として挙げておく。

以上、多少の例外は認められるが、福島方言のルが基本的にテイル形をとる表現で、状態変化の発生という動的な出来事ではなく、変化後の結果状態のみを表すということを述べた。

b）他動詞でのみ使用される（語彙的な例外をのぞく）

Sasaki & Yamazaki（2006）および佐々木（2007）は、他動詞から自動詞を派生させる文法的手段として「逆使役」の用法を特徴づけているが、2.1 節の（18）で見たように、自動詞に自発表現が生起して似た意味を表す例が各地で報告されている。

（71）a. 放っといたら凍ラサッタ。（北海道方言　山崎 1994:232）

b. このあたりはもう雪が溶ケラサッテイル。（北海道方言　円山 2007:62）

c. ボールが弾マサッタ。（宇都宮市方言　加藤 2000:22）

d. 紐でしばったら血が止マラーサッタ。　（静岡市井川方言　中田 1981:6）
（（18）再掲）

これらは「逆使役」という用語の定義からは外れるが、非情物の状態変化や結果状態を表すという点で、それに似た用法として位置づけられる（2.1 節参照）。

一方、福島方言のルは、後述する一部の例外をのぞき、他動詞にしか生起しない。

（72）溶カサッテル／止メラッテル／乗セラッテル／乾カサッテル　（他動詞）

（73）* 溶ケラッテル／ * 止マラッテル／ * 乗ラッテル／ * 乾カッテル　（有対自動詞）

（74）* 弾マッテル／ * 光ラッテル／ * 響カッテル　（無対自動詞）

（71）のような例を許す他方言の例にくらべれば、他動詞でのみ生産的に使われる福島方言のルは「逆使役」に特化した形式といえそうである。

ただし、以下に挙げる一部の自動詞では、例外的にルが生起する。

（75）開ガッテル（開グ）／ツカッテル（ツク）／片付ガッテル（片付ク）／クッツカッテル（クッツク）／貼ッツカッテル（貼ッツク＝貼リツク）／立ダッテル（立ズ）／並バッテル（並ぶ）

これらの自動詞では、自発表現のルは次のように使われる。

（76）机がきれいに並バッテル。

（77）そこの角に看板が立ダッテル。

（78）部屋がきれいに片付ガッテル。

いずれも対応する他動詞をもつ有対自動詞で、「（机を）並べる／（看板を）立てる／（部屋を）片付ける」という動作の結果生じた結果状態が表されている。それぞれを他動詞の「並ベラッテル／立デラッテル／片付ゲラッテル」という表現に置き換えても大きく意味は変わらない。また、4.1 節で挙げた a）主語が非情物にかぎられる、b）「～ニ」による動作主の表示を許さない、c）テイル形で結果状態を表す、といった特徴や、この 4.2 節で挙げた必ずテイル形をとるという特徴は自動詞の場合でも同様である。

（79）* 小学生が校庭に並バッテル。　（有情物主語）

（80）* 生徒ニ机がきれいに並バッテル。　（動作主の表示）

（81）（机を並べる作業を見て）* 机が次々と並バッテル。　（進行中の動作）

（82）* 机が 3 分で並バッタ。　（テイル形以外での使用）

以上のことから、（76）～（78）のような例も、その実質的な特徴は他動詞を用いた場合と同様であり、例外的にそれを自動詞によって表しているにすぎないといえる。

なお、ほかの動作主体によるはたらきかけが想定されない次のような例では自動詞にルを生起させることはできない。ルのつかない形のみが用いられる [12)]。

（83）山がいくつも｛並ンデル／＊並バッテル｝。

（84）ご飯に湯気が｛立ッテル／＊立ダッテル｝。

5. 語彙的な性質叙述の用法

4 節では、自発表現ルが生産的に用いられる用法（逆使役）について記述をおこなったが、1 節であらかじめ示したように、一部の動詞では性質叙述の意味で自発表現ルが使用される。

（85）このペンはよく書ガル。（書ける）

（86）この将棋の駒はまっすぐに立ダル。（立つ）　（（3）（4）再掲）

このような例は、2.1 節で示したうち「可能」の用法に相当すると考えられる。本節では、特定の動詞にのみ見られるこの用法について記述をおこなう。

まず、このような用法でルが使われうる動詞としては、以下のものが挙げられる。

（87）置ガル（置グ）／書ガル（書グ）／敷カル（敷ク）／巻カル（巻ク）／映サル（映ス）／切リ離サル（切リ離ス）／ツブサル（ツブス）／吊ルサル（吊ルス）／外サル（外ス）／干サル（干ス）　（他動詞）

（88）開ガル（開グ）／ツカル（ツク）／片付ガル（片付ク）／クッツカル（クッツク）／貼ッツカル（貼ッツク＝貼リツク）／立ダル（立ズ）／並バル（並ぶ）　（自動詞）

このうち、自動詞として挙げたものは、4.2 節 b）の（75）で取り上げたものと同じである。1 節でも挙げたが、基本的に、これら以外の動詞では、本節で示す性質叙述の用法をルが表すことはない。

（89）このペンはよく書ガル。（書ける）

（90）？この消しゴムはきれいに消サル。（消せる）

（91）＊この糊はしっかり貼ラル。（貼れる）　（（10）～（12）の再掲）

先に他動詞の場合について挙例するが、この用法のルは、特に動作の対象や道具など、非情物の性質を表す場合に使われる。

（92）この字は一筆書きで書ガル。

（93）この用紙はミシン目に沿って切リ離サル。

（94）この物干し竿はたくさん洗濯物が干サル。

（95）部屋が狭くてこの布団は敷カンネー。

（96）このペンはすらすら書ガンネー。

2.1 節で見たように、他の方言では一時的な状況を表す（97）のような例でも自発表現が使われるが、福島方言のルは、一時的に生じた状況による可能の意味は表さない。

（97）a. 足が痛くて走ラサラナイ。　（北海道方言　円山 2007:59）
b. 今日は暇だから行カサル　（宇都宮市方言　加藤 2000:40）
c. 医者に言われて俺は煙草が飲マーサラノー。　（静岡市井川方言　中田 1981:4）
d. 酒を飲みたいのに、なかなか飲マラネ　（山形市方言　渋谷 2006:52）
（（15）再掲）

（98）* 周りが静かで、すらすら論文が書ガル。
（99）* 今日は天気だから、洗濯物が干サル。
（100）* 腕が痛くて文字が書ガンネー。
（101）* 今日は雨だから、洗濯物が干サンネー。

また、他方言の自発表現と同様、能力可能の場合には使えない。

（102）* 俺は、漢字ドリルを繰り返しやったから、難しい漢字も書ガル。
（103）* 俺は、授業中居眠りしていたから、こんな簡単な漢字も書ガンネー。

このように、福島方言では、他方言で「可能」とされるような用法のうち、非情物の性質を表す場合にのみ自発表現ルが用いられる。ここまでは他動詞の例について示したが、自動詞でも、ルはもっぱら非情物の性質を表す。

（104）このシールはどこにでも貼ッツカル。
（105）この麻雀卓だと、牌が自動で並バル。
（106）俺の部屋は、本が多すぎてなかなか片付ガンネー。

以上、特定の動詞にのみ認められる用法ではあるが、ルによって表される性質叙述の用法について簡単にまとめた。福島方言のルは、「可能」というより、むしろ非情物の性質叙述の表現として使用されており、その点で他方言の自発表現とは異なっている。

6. まとめ

本稿では、福島方言の自発表現ルについて取り上げ、その特徴を記述した。

2.1 節でまとめたとおり、東日本諸方言に見られる自発表現サル・ルの用法は、「自発」「可能」「逆使役」の 3 つに分かれる。しかし、冒頭の 1 節で示したとおり、福島方言のルは「自発」の用法を持たず、「逆使役」の用法でのみ生産的に使用される。また、「可能」の用法は「書グ」など特定の動詞でしか認められない。

このうち、4 節で記述した「逆使役」の用法では、a）主語が非情物にかぎられる、b）「～ニ」による動作主の表示を許さない、c）テイル形で結果状態を表す、など、他方言の自発表現と同様の特徴が、福島方言のルにも観察される。しかし、基本的にテイル形でのみ使用されるとい

う点で、福島方言のルは他方言の自発表現と性格を異にする。つまり、福島方言のルは、他方言の「書カサッタ」のように状態変化の発生という動的な事態を表すことはせず、常にテイル形で変化後の結果状態のみを表す。

また、5節で記述した「可能」の用法は特定の動詞でのみ見られるが、福島方言のルは、他方言の自発表現と異なり、特に非情物の性質叙述にかぎって使用される。

「逆使役」の用法で結果状態が表される場合でも、「可能」の用法で性質が表される場合でも、「非情物に生じた／備わった非動的なことがら（状態や性質）」を表すという点で福島方言のルには共通した特性が観察される。これまで報告されてきた他方言の自発表現は、「自発」の用法を持つことから分かるとおり、動作の意図性や意志を持った動作主の存在を排するところに本来的な意味があると考えられる。一方、福島方言のルは、その結果として前面化される動作の対象としての非情物のありかたを表すことに特化して使われているといえそうである。

以上、福島方言の自発表現ルについて記述をおこなった。ところで、福島方言のルの用例は、非情物を主語にとり、動作主の存在を排したうえでテイルという状態性の表現をとる点などで、中古の仮名散文に見られる（つまり日本語に「固有」とされる）「非情の受身」と似通った特徴を持つ（小杉 1979、金水 1991 など参照）。各地の方言やこのような時代的な変種をふくめ、日本語の自発・受身の表現について対照をおこなうことは、ひとつの興味深いテーマとなりうる。しかし、本稿の論点は、さしあたって福島方言の自発表現ルを記述することにあるため、以上で論を終えることとする。

注

1）ッキャは、回想を表すケに期待とは異なる動的事態の出現を表す終助詞ハがついた形（渋谷 2006:50）。

2）渋谷（2006:58）によれば、山形市方言のイタは現在時制も表す。また、～テダ（～テイタ）という形はテダ＞ッタのようにテが促音化する。つまり、渋谷の挙げた「書ガッタ（＜書ガテダ）」は標準語のテイル形に相当する意味を持つと解釈される。

3）筆者は 1982 年福島県保原町（現伊達市）生まれ。両親とも保原町出身。居住歴は以下のとおり。

0-5 歳：福島県福島市　5-7 歳：同保原町　7-12 歳：同郡山市 12-14 歳：同白河市 14-18 歳：同福島市 18-29 歳（現在）：大阪府豊中市

このうち福島市と保原町が県北地方に含まれる（保原町は福島市のベッドタウン）。なお、ルは特に都市部（福島市街地）の若年層では使用されなくなりつつあるようだが、筆者にとっては、福島の家族や友人と話すときに使用する日常的な表現である。

4）先天的な能力による能力可能の例では自発表現が使用されるという報告が見られる。先天的な能力では動作主による制御のありかたというものが問題にならないためと考えられる。

（a）うちの赤ん坊も歩カサルヨーンなった。（歩けるように）　（宇都宮市方言　加藤 2000:39）

（b）人間はことばをシャベラーサル。（しゃべれる）　（静岡市井川方言　中田 1981:4）

5）ただし、加藤（2000）は 1 つ目の用法を「偶発行為用法」と呼んでいる。

6）ただし、a と b は山崎（1994:228）から Sasaki & Yamazaki が援用した例。

7）この音変化は、自発や受身・可能といった文法的意味とは関係なく、単に音的な条件によって適用されるものである。下に自発、受身・可能とは関わらない場合の例を掲げる。

（a）（目を）ツブンネ　（＜ツブラネ：瞑らない）

（b）（店が）ツブンニ　（＜ツブレネ：潰れない）

（c）（店が）ツブッチャ　（＜ツブレダ：潰れた）

また、このような音変化は義務的に起こるわけではなく、特に「カガラネ」は音変化の起こらない「カガラネ」という形も比較的頻繁に使用される。

8）～テクルのような複合的表現では、前部要素の動詞のみが自発の形をとり、後部要素のクルが自発の形をとることはない。

（例）実家から荷物が｛送ラッテキテル／＊送ッテコラッテル｝。

9）ただし、有情物主語の例として北海道方言の「（子供が）一年間でシツケラサッタ」「（子供が）シツケラサッテル」（Sasaki & Yamazaki 2006:364）などの例もわずかに見られる。

10）ただし、宇都宮市方言を対象にした加藤（2000:34）では「お湯が沸カサッテル」のような例が進行中の状態を表しうることが示されている。

11）ただし、盛岡市方言を対象にした竹田（1998）では、テイル形以外での用例が挙げられていない

12）山形市方言でも、「（電気が）ツク／ツカル」「（ドアが）開グ／開ガル」の意味的な違いとして同様のことが指摘されている（渋谷 2006:57）。

参考文献

加藤昌彦（2000）「宇都宮方言におけるいわゆる自発を表す形式の意味的および形態統語的特徴」『国立民族学博物館研究報告』25-1

金水敏（1991）「受動文の歴史についての一考察」『国語学』164

小杉商一（1979）「非情の受身について」田辺博士古稀記念国学論集編集委員会編『田辺博士古希記念国語助詞助動詞論叢』桜楓社

竹田晃子（1998）「岩手県盛岡市方言におけるサル形式の意味的特徴」『国語学研究』37

佐々木冠（2007）「北海道方言における形態的逆使役の成立条件」角田三枝・佐々木冠・塩谷亨編『他動性の通言語的研究』くろしお出版

渋谷勝己（2002）「自発」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』（科研報告書）

――――（2006）「第 2 章　自発・可能」小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂編著『シリーズ方言学 2　方言の文法』岩波書店

中田敏夫（1981）「静岡県大井川流域方言におけるサル形自動詞」『都大論究』18

円山拓子（2007）「自発と可能の対照研究　日本語られる、北海道方言ラサル、韓国語 cita」『日本語文法』7-1

森山卓郎・渋谷勝己（1988）「いわゆる自発について　－山形市方言を中心に－」『国語学』152

山崎哲永（1994）「北海道方言における自発の助動詞 -rasaru の用法とその意味分析」北海道方言研究会編『北海道方言研究会 20 周年記念論文集　ことばの世界』

Haspelmath, Martin. 1993. More on the typology of inchoative/causative alternations. In Bernard Comrie & Maria Polinsky eds., *Causatives and transitivity*, 87-120. Amsterdam:

John Benjamins.
Sasaki, Kan & Akie Yamazaki 2006. Two types of detransitive constructions in the Hokkaido dialect of Japanese. In Werner Abraham & Larisa Leisio eds., *Passivization and typology: Form and function*, 352-272. Amsterdam: John Benjamins.
Vendler, Zeno 1967. *Linguistics in philosophy*. Ithaca, N.Y.: Counell University Press.

（文学研究科助教）